

5-5		主題	個浴から始まる自立支援 ～機械浴ゼロを目指す	
個浴がもたらす効果		副題	木のお風呂が教えてくれる普通の生活	
本来の能力を引き出す				
研究期間	16ヶ月	事業所	特別養護老人ホーム フレンズホーム	
発表者：渡邊 久子（わたなべ ひさこ）			アドバイザー：山田 穰（やまだ ゆたか）	
共同研究者：野口 淳史 青木 拓也 鈴木 裕貴 澤井 由貴				
電話	03-3422-7211	メール	info@n-friends.or.jp	
FAX	03-3422-7227	URL	http://www.n-friends.or.jp/	

今回発表の事業所やサービスの紹介	世田谷区三軒茶屋の住宅街に位置し、平成2年より高齢者事業を開始した。特別養護老人ホーム（定員65名、ショートステイ4名）と併設のデイサービスその他、外部にデイサービスが3か所ある。地域福祉の拠点施設としての役割を果たしつつ、理念の下、自立支援・利用者本位のサービスを展開している。特養入居者の平均年齢88歳、平均要介護度4.3。
------------------	--

《研究前の状況と課題》 一般浴室に設置されていた介助浴用リフトの老朽化による安全面の見直しを行う一方で、利用者の重度化による大浴槽の対象者が減少し、高熱水費の削減策と大浴槽に代わる浴室の設備の再検討は喫緊の課題であった。開設20周年記念事業の一環として、21年6月に入浴プロジェクトチームを立ち上げ、一般浴槽の全面改修案を模索した。 複数の施設を見学し、検討を重ねた結果、最終的に辿り着いたコンセプトは、①省エネ・個別ケア・自立支援を最大限に実現する檜風呂 ②ゆったりと寛げる浴室（照明・素材にこだわった内装、動線を考慮した洗面・シャワースペースの配置）③利用者の状態像に対応できる4種（既存の機械浴とミスト浴を含む）の浴槽とし、総工事費1,500万円、一部東京都介護職員業務省力化支援事業を導入し、その他はすべて自己資金で賄った。	《研究の目標と期待する成果》 22年度の個浴利用者40名を目標にする。檜のいい香りがする個浴に、ごく普通に入学して頂く。木の淵を掴むことによって、何十年と体が覚えているお風呂に入る、という動作を自然に思い出すように誘導していく。敢えて、手すり等は設置せず、残存する身体能力を引き出す。 そして、何より、個浴は1対1の対応となり、普段はなかなか出来ない職員と利用者のコミュニケーションの場となることを期待した。それぞれの利用者の好みに応じて、湯温を調節することから、昔の思い出話に至るまで、お風呂で笑い、気持ちよくなって頂くことが認知症の緩和、ひいては、QOLの向上に繋がると考えた。
---	--

《具体的な取り組みの内容》

・22年2月、準備段階として

- ① 生活介護課長を中心に個浴導入のプロジェクト「U」を立ち上げた。
- ② 個浴導入に成功している横浜の施設に、プロジェクトのメンバーで見学に出掛け、実際に入浴介助をさせてもらった。この経験が、個浴を使って入浴することのイメージを作り、大いに役立った。
- ③ 業務終了後に浴槽に湯を張り、実地研修を重ねた。

・22年3月、個浴使用開始。

- ① まずは、自立している利用者、立位のとれる利用者から入浴を開始した。
- ② 初めて個浴に入る利用者には、個浴実施記録をつけ、入浴状況を職員に周知した。
- ③ 立位がとれない利用者は、パンジー浴から始め、入浴時の状態を把握してから、個浴へと移行することとした。
- ④ マニュアル整備委員会のメンバーと合同で、パンジー浴・個浴の手順書を作成し、職員に周知、使用しながら、改訂を続け、手順書の完成度を高めた。

・23年3月、個浴利用者は37名。立位のとれる利用者はほとんど個浴に移行した。移行できていない利用者の分析をした結果、個浴の専門家による研修が必要不可欠であると感じ、23年度の計画として、リハビリデザイン研究所の山田穰氏に研修を依頼した。

《取り組みの結果と評価》

- ① 機械浴利用では、拒否があったり、大きな声をあげたりする利用者が、個浴を楽しむようになった。
- ② 個浴利用者の数は、32名頃までは、順調に増えていったが、それからが難しかった。その難関を越えるために、山田穰氏による研修は欠かすことが出来なかったと思う。単に入浴技術だけではなく、生理的動作を利用することを知った。また、職員が自ら率先して研修に参加し、一丸となって、取り組んでいるという強い意欲が感じられた。
- ③ 研修後に、拘縮や麻痺のある利用者が個浴へ移行し、障害があっても個浴に入れるという意識が生まれた。

《まとめ》

職員が、利用者の状態にあった安全な入浴方法を身に付け、どんな条件の方でも、挑戦する意欲と自信が付き「個浴に入る嬉しそうな顔を想像するのが楽しい」までになった。

また、端座位安定のために、日中はオムツからリハパンにし、トイレ誘導を開始した結果、オムツ外しに成功したり、浴槽に入るために、排便コントロールをして、下剤を中止するなど、生活全般を見直すきっかけとなった。利用者にとって、普通の生活とは何かを常に考えながら機械浴廃止を目指していきたい。

《提案と発信》

機械浴で利用者を受け身にしてしまった介護から、個浴の力を借りて、本来の能力を引き出す介護に変わった。そして、利用者は自分自身を取り戻した。生きる気力を失っていたという94歳Hさん、「お風呂の淵に掴まったら、いろんなことを思い出したの。」という顔は、とても輝いていた。言葉が次々と溢れ、その笑顔は、私達にやりがいと諦めないことを教えてくれた。

【メモ欄】